

語りたいた話耳傾ける

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

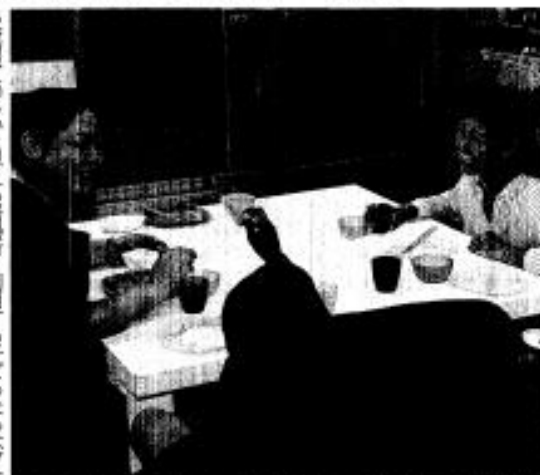
第4部 支援の現場から (3)

④

「肉じゃが、おいしい。おかわりしてもいい？」。子どもの素直な感情に、女性スタッフの表情がほころんだ。「いっぱい食べて」

南風原町兼城の一般社団法人カナカナで5月中旬、夜の子ども達の居場所づくりが始まった。寝る場所が狭いカプセルを開放し、必要に応じて夕食と午後10時までの居場所を提供する。町のユースセンター・カプセル事業として金100万円を10月、木曜を担う「学園」と連携し、通った白切れ目々々支援する。事業は町内に住む小学生の兄弟第一組を対象にスタート。活動日は随時変更の子どもたちも集まり、「一緒に遊ぼう」とかきま。小学生の子が学校の先生の物まねをするたび、保育関係が大笑

「安心でき楽しめる居場所に」



夜の居場所で子どもたちの話を聞く松田かなえさん(右)と上江村美奈さん(左)南風原町兼城

る笑顔を、美しいと思える居場所を目指したい。地域のじいちゃんやばあちゃんに気軽に立ち寄って、くれるような居場所をつくりたい」と抱負を語る。

利用する子どもたちは夕食の配膳やテーブル拭きなどを自主的に手伝ってこなす。松田さん、調理担当スタッフの上江村美奈さん(左)は、子どもたちと一緒に食卓を囲む。夕食後は書道教室を習った子どもが本音を話しやすい話した。

「この間も、公園でアメリカ人の子と一緒に遊んだ」「言葉通じた？」「マイネームイズ、田島正隆」

「つて言えたぜ」「すごいね」。あはどんな話したの？」「英語でワンコって何で言うの、とかも覚え、食べてる時じゃなくよかった。いたすらっくく笑う高学年の男子をスタッフがあきれて、たしなめる。質問攻めにするのでなく、あくまで自然な会話の中、子どもが語りたがる話に耳を傾ける。日常の中の得意のない会話を子どもたちの表情が和らぐ。